

「笑い」による社会的信頼関係の構築

—史的観点からの考察—

浦 和男¹

【要約】

「笑い」には「親和作用」、「誘因作用」、「浄化作用」、「解放作用」の四作用があり、この作用は社会的信頼関係の構築にも機能する。人々は「笑い」でこの四機能を作用させ、「笑い」の下で平等となり、相互に信頼関係を結ぶ。この小さな信頼関係の創出が積み重なると、より多くの匿名の人々を巻き込む大きな信頼関係を創出することになり、対社会的な信頼関係が構築される。歴史的事象を検討すると、「笑い」によって匿名多数の人々が社会的信頼関係を創出する事例が多数見受けられる。本稿では、「笑い」を活用して大きな社会的信頼関係が創出し構築される事例として、明治期の自由民権運動、昭和初期の漫才、大戦末期の国策運動を考察する。自由民権運動と昭和初期の漫才は、「笑い」によって人々相互の、さらに社会との信頼関係を創出・構築した。前者は一定の政治的成果を勝ち取り、個人が意見述べる自由を教えた。後者は、不穏な社会を耐え忍ぶ精神的なつながりを強固にした。国策運動の押しつけの「笑い」では信頼関係は創出しなかった。現代において「笑い」を活用した社会的信頼関係をどのような場で、いかに構築するかを検討することは、今後の課題である。

キーワード: 笑い、ユーモア、自由民権運動、漫才、笑和運動

1. 「笑い」の四作用

「笑い」が社会的信頼確立に果たした役割を歴史的に考察する²。

「笑い」の効用について、井上宏は「親和作用」、「誘因作用」、「浄化作用」、「解放作用」を早くから指摘している(井上 1984)。

「親和作用」とは、相互の「笑い」によってお互いを惹きつけ、良き交友関係が生じる作用である。作家の秋田實は「潤滑油としての笑い」と表現し、「笑いは、私たちの日々の暮らしの、言わば潤滑油みたいなものです。私たちは毎日、大小色々の用件で、色々の人たちと接触して話します。その歯車の回転を、笑いがなめらかに快よく押し進めて行ってくれるのです。」(秋田 1984a: 44)と述べる。

「誘因作用」は、「笑い」あるところに人が誘われて集まる作用である。ことわざの「笑う門には福来たる」は、「笑い」によって自然と幸福が寄って来ることを説き、「誘因作用」の効力を端的に説明している。

「浄化作用」は、身体的には「笑いは健康に良い」ということであり、「諷刺」の「笑い」は社会悪を「浄化」する手段として古今東西で使用される。「笑い」が長寿の秘訣であることは、すでに江戸

¹ 関西大学人間健康学部准教授

² 本稿では、笑う行為、笑いを引き起こす要因を総称して『笑い』として表記する。

時代に山東京伝が黄表紙『御詠染長寿小紋』の最後に述べている。「なるほど此本は命ののびるほんだ。おかしいおかしい、あはゝあはゝあはゝあはゝとわらふたびに命がのびるやつさ」(棚橋 2000:192)。ことわざにも「笑いは人の薬」がある。

「解放作用」は、寺田寅彦が「笑いと精神的の弛緩との関係」(寺田 1999:274)と述べるものである。落語家桂枝雀は、落語は緊張の緩和によって笑う現象を呼び起こすことを指摘している(桂 1993)。

織田正吉は、「笑いが受け入れられる場所を私は『笑いの場』と呼ぶ」とし、「家庭が、会社、学校が笑いの場となるかどうかは、『笑いの下の平等』を受け入れるかどうかによる」と指摘する(織田 2013:266)。「笑いの下の平等」を受け入れるとは、「笑い」によって「親和」、「誘因」、「浄化」、「解放」の四作用が機能し、お互いに信頼関係を生じさせ、家庭でも、会社でも、学校でも、あらゆる場で信頼関係を創出することである。社会的信頼関係を構築するためには、「笑い」の存在が不可欠ということになる。

しかし、「笑い」は諸刃の剣である。下卑た笑いをする人にはそれなりの人が集まり、その「笑い」で健全なものを汚染する。いくら「笑いは百薬の長」と論じて、論者の「笑い」が下卑たものであれば、「笑い」は百薬の長にはならない。以上の四作用は肯定的な面としての作用であるが、反対に否定な面には「攻撃作用」がある。いじめやハラスメントの「笑い」は、この作用の典型である。「笑い」によって社会的信頼関係が構築されるとき、この「攻撃作用」は排除されなければならない。この作用を保持する社会は、否定な信頼関係を相互に持ち合わせることになる。

社会的信頼を勝ち取るための「笑い」として、学生たちに「就職の面接試験では、笑いが起こるぐらいの余裕を持ちなさい。常に笑顔を忘れずに。」と指導をする。面接官を引き付け(「親和」、「誘因」)、見かけの悪いイメージを払拭し(「浄化」)、場の雰囲気のを和やかにする(「解放」)。私たちは、このような小さな社会的信頼関係が構築されることを日常生活で学習し、習得する。この小さな社会的信頼関係の構築が積み重なれば、「笑い」によってより大きな、多数の匿名の人々を巻き込む社会的信頼関係が構築されることになる。

こうした作用をもたらす「笑い」を引き起こす要因の代表例が、落語と漫才である。江戸中期の江戸と大坂それぞれに落語家の祖となる人物が登場し、「笑い」が商芸となり広まる。書籍形態の小咄本も多数出版され、演じる「笑い」と同時に読む「笑い」も普及する。明治期には欧米からの「笑い」の概念や話が文明開化とともに受容され、近代国家樹立の中で近代的な「笑い」が育ち、「笑い」が近代国家樹立に貢献する。江戸期の「笑い」がつまらぬもの、古いものとされ、「笑い」も近代化する。昭和初期は空前の「ユーモア」流行期であった。「マルクス」とともに「ユーモア」の文字が、新聞の広告欄に踊った。従来の「萬歳」がしゃべくりを中心とする「高級萬歳」となり、新しい演芸としての「漫才」が成立する。そして、戦争末期には「笑い」が国策にも取り入れられる。

本稿では、「笑い」によって人々が社会的信頼関係を相互に結び、そこから対社会的な信頼関係を構築する過程を歴史的な観点から考察する。対象となる時代は、明治初期、大正末から昭和初期、昭和戦前末期である。日本の近代化と文化的発展の背景には、「笑い」が存在したこ

と。その「笑い」によって、不特定多数の人々は相互に信頼関係を構築し、対社会との信頼関係を構築し、社会と人間が健全な状態を創り出そうとする力学が働く。明治初期、大正末から昭和初期が、その力学が働いた時代であった。その力学を国策として活用しようとしたのが、昭和戦前末期であった。

2. 明治期における「笑い」と社会的信頼の創出

「笑い」も文明開化の影響を受ける。明治改元とともに欧米に倣う国家の近代化政策が始まると、欧米的な「笑い」の科学的な知識も紹介される(浦 2011, 2014)。まず、「笑い」は呼吸作用と関わる身体機能であり、横隔膜の開閉が関与すること、「笑い」は人間固有の現象であることなどが、医学的知識として医学書に書かれた。続いて“humor”の概念が紹介されるが、翻訳不可能な語彙であり、多くの哲学者、文人たちがその訳語と定義に悩まされた³。一方、江戸期の「笑い」は古くさいものと排除されることになる。

同じ頃、欧米では、レトリックとしてユーモアを含み入れた文章を書く作法を説く教科書が多数刊行されていた。日本の初等教育は「読み、書き、そろばん」であるが、「書く」には現代のような「文章作成」は含まれていない。「作文」の必要性を説くのは、明治以降である。composition という、情報伝達や事実を書きまとめるための技術が近代化に必要とされ、そのための教科書が輸入され、訳出される。そこにレトリックとしての humor や wit が論じられ、文明開化明治国家の近代化のための個人の技術として定着して行く。

レトリックとしての humor は「文章作法」の技術として紹介されたが、「文を作る」ことは「話を作る」と同じであり、「書く」ためのレトリックを「話す」ことに応用し、話に「笑い」の要素を含めようとする考えが生まれた。「笑い」を引き起こす聴き手が相互に信頼関係を構築し、話し手と信頼関係を構築し、大きな信頼関係を創出することで社会を変えようとする試みである。

明治 7(1874)年頃から始まる自由民権運動は、明治 13(1880)年から 23(1890)年頃まで高揚する。江戸時代には自分の意見を聴衆の前で語るといった概念はなかったが、欧米の「演説」は日本の先進的な人々に大きく影響を与えた。演説は雄弁でなければならない。その雄弁さの技巧のひとつとして、「笑い」が着目されることになる。

明治 14(1881)年 10 月、当時慶応義塾の教員であった真野観我(秀雄)は、アルデン訳『西洋演説軌範』(競錦書房、東京)を出版した。原著者は「米国、アルデン」とのみ記載され、原典の説明もない⁴。この書には、「シドニー・スミス」の「滑稽頓知ノ効能」を含む。スミスは、滑稽や頓知は「他ノ勝レタル判決力ヤ善キ才能ナド、一所ニ働クトキハ実ニ結構至極ノモノ」だとする。

³ 150 年後の今日でも、研究者間で“humor”の統一した見解は見られない。対応しうる語彙としては「滑稽」がある。“humor”は知的な要素を含み、対人関係の素を作る機能を有するが、「滑稽」は、人そのものあるいは言動も含めて、ある対象のおかしさを含む面として解釈される。「ユーモアある人」と「滑稽な人」では、意味合いが異なってくる。

⁴ NDL-OPAC では“Aruden”とあるが、これはローマ字表記で、正しくは“Alden”と思われる。原典不詳。

その翌年、明治 15(1882)年 3 月にクワッケンブス著、黒岩大訳『雄弁美辞法』(与論社、東京)が出版された。黒岩大は後の黒岩涙香、当時 20 才前の青年である。原著は、George Payn Quackenbos の“Advanced course of composition and rhetoric”で、文章修辞学の入門書として欧米で広く読まれ、版を重ねた。1854 年初版、黒岩はいずれかの版を読み、その抄訳を上梓した。「緒言」には、近来演説討論が盛んになり、その参考書が必要だが、言語の用法を主とした書が少なく、この書がその用法を詳述しているので訳したという。「言語の用法」とは、「演説の語り」である。

原著では“Part III Rhetoric”に“XLV Wit”と XLVI Humour and Ridicule“があり、「第七章 語辞ノ滑稽ヲ論ズ」(105)として、抄訳に自説を加えてまとめている。滑稽は人をいたずらに笑わせるのが目的ではなく、「滑稽ノ用ヲ知ツテ用ユルハ其目的ヤ人ヲシテ解シ易カラシメ且ツ記憶ニ便ナラシムルニ在ルナリ」(105-106)と説き、「其主意ヲ説明スル方法ノ奇異ナルガ為ニ人ヲ楽シマシムル」(107)のだとも指摘している。堅苦しい演説も、おもしろみを添えて説明すれば聴衆は楽しみ、理解もし易いし、記憶にも残るということであるが、これは、「笑い」の「親和作用」と「誘引作用」に関わる指摘である。

自由民権運動の演説に「笑い」が取り込まれることで、演説に説得力が生まれた。聴き手は「ヒアヒア」(hear, hear)と騒いで話を聞くように促すと同時に、話を先に進ませる。「笑い」を起こす演説で、弁論者は聴衆に信頼を与える。聴衆はその演説を理解し、彼らの主張を良しとし、ここにお互いの信頼関係が創出する。ここで構築された社会的信頼関係は、世の体制に大きな影響を与えた。さらに大きな効果としては、信頼関係を築く「個人」という存在に聴き手に気付かせたことが挙げられるだろう。

この書は明治 20(1887)年に第三版が刊行されるほど、多くの読者を得た。この書の影響は意外なところに現れる。熊本の真宗の僧侶、加藤恵証は、真宗の説教に「滑稽」の要素を含め、説教師と信者の相互の信頼関係を獲得しようと考えた。黒岩の書が出たわずか半年後の 9 月に、『弁士必携仏教演説指南』(布部文海堂、京都)を出版した。奥付に寄れば千部の発行という。

「第九章 八個之詞格」(21 丁表)で話し方の態度を論じ、「格ノ第八」(23 丁表)が「滑稽ナル体」となる。「戯言洒落ヲ以テ他ノ笑ヲ博シ興ニ乗セテ我論意ヲ感ゼシムルノ体ナリ 此体ヲ用ユル時ハ成ルベク論旨堅固鋭敏ナルヲ要ス 若シ主義ノ脆弱ナル者ニハ決シテ此体ヲ用ユベカラズ 然シ聴衆ヲシテ領ノ何レニ落シヤヲ知ラザシムルニ至ラン」と、「笑い」を用いる対象についての注意を与える。その後の「第十章 滑稽之用法」(23 丁表)で、「滑稽ノ事タル正方ニ非ズ変則ナリ 而シテ主意ノ快ナルヲ以テ人ヲ楽シマシムルニ非ズシテ説明方法ノ奇異ナルガ為メニ人ヲ楽シマシムル者ナリ」と説明するが、これは『雄弁美辞法』と同一文であり、恵証は黒岩の書を剽窃している。しかし、黒岩が滑稽の特質として指摘する 4 点を 7 点に広げ、よりわかりやすくし、説教に「笑い」を起こすことは「親ノ急病ヲ報ゼラレシ者ノ外ハ足ヲ止ムルヤ必セリ 是余ガ屢々実験セシ不動明王ノ秘宝ナリ」(25 丁裏)と説く。さらに、滑稽が多くなると聴衆は仏教を軽蔑するようになるので、使いすぎないことも大切だと指摘する。「笑い」の効能が「不動明王ノ秘宝」とは、

不動明王の「怒り」の尊顔と「笑い」の対比を思い起こし、思わず笑顔となり、首肯する。これが恵証師の「笑い」の説法であろう。

「笑い」を聴衆から引きおこすことは、弁者に注目が集まり、話の内容をよく理解させる。ここには「信頼」という表現は使用されていないが、「笑い」を媒介にして、弁者と聴衆の信頼関係の創出しようとする発想が根底にある。自由民権論者たちは、聴衆との信頼関係を創出することで聴衆を味方に引き入れ、社会の改革を実現しようとした。説教師たちは、信仰の布教によって、社会生活の改善を実現しようとした。社会との関わりを活性化するために、「笑い」を媒介とする相互の信頼関係が、狭い範囲ながらも試みられたのは、江戸期にはない特徴である。

明治20年代から30年代初頭にかけて、欧米の影響を受けた文章修辞学の著作が次々に刊行される。そのうち、明治26(1893)年に博文館から出版された『応用文章学』(通俗教育全書第五十九編)は、著者松浦政泰が大阪の泰西学館と京都の同社女学校で講義した内容を中心にまとめた書である(写真1)。松浦は同志社英学校出身で、欧米のレトリック理論を原書で読みこなし、それを日本の教育現場に応用するための工夫をなしている。「第三章 嗜好快樂論」のうち「第四節 笑謔」であり、「第一 笑謔の理論」、「第二 笑謔の原因」とする。「文章学」と銘打っているが、会話など「話をする」ことにも重きを置いている。「笑謔」は「諧謔、滑稽、嘲謔」の三種とし、「嘲笑(ridicule)」は、「滑稽の、諷刺譏諷の気を帯ぶるものなり。正正の陣を張て堂堂議論するに足らざるときに、之を用ふれば、反対論者は、反駁する能はずして、其効驗却て多しとす。」(松浦1983:224)と指摘する。「諧謔」は「更に関係なき事物に、新奇なる関係を有せしめ、以て驚喜なる感動を提醒するものなり。」で、「滑稽」は「諧謔の同情好意を帯ぶるものなり。諧謔は、電光一閃、忽ち輝て忽ち消ゆるも、滑稽は日光の如く、常に照らして常に楽しめ、滑稽は心の感動と智性の勸念を含むを以て、諧謔より貴しとす。」(223)と説明する。

ここにも「信頼」という表現は使われていないが、根底の発想は自由民権論運動の演説への「笑い」の活用と同様である。相手を安心させる手段としての「笑い」を活用は、相手との信頼関係を創出する手段の説明に他ならない。松浦が、ともにキリスト教系学校とはいえ、中等教育段階で「笑い」の活用を含めた点は、新しい時代に相手からの信頼を勝ち取り、信頼関係を創出することの大切さが理解されるようになったからであろう。

ただし、恵証師が指摘したように、「滑稽」が過ぎてしまうと本来の目的が薄れてしまい、明治20年代後半には「滑稽演説」と称する演芸が登場し、人気を博することになる。

明治の近代化が進み、明治30年代に学制が確立し、教育を受ける者が増え、さらに高等教育を受ける者も増えると、「立身出世」が説かれ始める。「立身出世」の「処世」として、30年代後半から「笑い」の必要性が論じられる。大日本実業学会なる団体は、「立身出世」の参考書として「成功叢書」を発行し、その第二編として、「サクセス雑誌主筆」マーデン原著、都倉義一纂訳の『処世と愛嬌』が明治36(1903)に出版された⁵。その第一章は「快活なる笑」で、「笑ふ力は経済上謙

⁵ Orison Marden(1848-1924)。成功哲学を論じた実業家、著述家。原典不詳。

良なる目的に供せんが為め吾人に付与せられたるものなり。同時に内部の諸機関を運動せしめ吾人に快樂を与へしめんが為め自然が工夫した妙用なり。」(3)と、「笑い」の意義を説く。そして、「幸福なる人とは自家の幸福を祝して能く自ら笑ひ得るの人なり。」(18)であるという。幸福になるためには「笑い」が必要だという。明治 40(1907)年に出版されたマーデンの『快活なる精神』(波多野鳥峰訳、実業之日本社)は、増補版の訳と思われる。この書では、「快活なる笑声は成功の一大要素なり」(18)の一節がある。

同年、ウォーターマン著、村上池州訳述、『社会の要する少年』(内外出版協会)が刊行された⁶。第六章「快活」の「成功の障碍としての悲観主義」には、「吾々が世界に対して笑へば世界は吾々に対して笑ふ。吾々が顔を顰めれば世界も顔をしかめる。」(72)と説かれる。また、「笑い」と職業」には、「汝の口には常に笑を含むべし。流涕大息して世を狭く送らんよりは、快活に希望を抱いて、取得せんと欲する目的に達せんことを努むるに如かず。」(73)とある。「笑い」によって他者の「信頼」を得ることができ、それによって「成功」という欧米の発想が日本に需要されることになる。

このような欧米的な発想が紹介され、受容されると、「笑い」の効果もさらに説かれるようになる。明治 43(1910)年の児玉修治述『運命開拓秘密之鍵』(楽山堂書房)には、「煩悶を脱却し、健康を欲する人は、常に此の笑の趣味を失ってはなりません。」(123)、「健康を保ち、煩悶に陥らぬやうにするには、先づ這の笑ひの趣味を充分養成する必要があります。」(127)のごとき、今日流行絶えぬ「笑い」と健康」法がすでに論じられている。翌年の明治 44(1911)年に出版された堀内新泉著『現代執務法』(博文館)には「三十一 執務上に於ける微笑の価値」があり、「微笑せよ、微笑せよ、先づ勉めて微笑せよ。長く執務の上にこの心懸を失はずんば、終には執務上に於ける微笑の価値を了解して、我れ知らず執務中常に微笑するに至るべし。」(93)と力説している。「笑い」が他者との信頼関係を築くだけではなく、自己内面の自己への信頼を勝ち取る、つまり自信をつけるために必須であることが、明治末年には知られるようになる。このような「笑い」の効用を知り得た階層は中流以上であっただろうが、大正末期から新社会層として成長するサラリーマン＝ホワイトカラー層を軸に、この効用が広く理解されたことはまちがいない、この層は約 20 年後の経済恐慌の苦しい時期を生活に喘ぎながらも乗り切ることができた。「笑い」を通して新しい信頼関係を創出し、自らの立場を強固なものにしようとした企業と、それに乗じて国民を統率しようとした国の政策に、新興の社会層を中心に取り込まれて行く。

3. 昭和初期恐慌期とユーモアブーム

昭和初期に空前の「ユーモア」ブームが起こった(浦 2012)。世界恐慌に取り込まれ、経済の

⁶ Nixon Waterman(1859-1944)。新聞記者。原典は”Boy Wanted”(1906)。国会図書館デジタルコレクション書誌情報では「オーターマン」と誤記されている。

不透明さは深刻化する一方、大正デモクラシーによる民主主義、自由主義の風潮が昭和初期に開花し、関東大震災からの社会の復興、大正から昭和への改元による新しい時代への期待が爆発する。明治期の急激な文明開化と社会および文化の発展は、大正期に小休止し、昭和の始動とともに、社会は急な坂道を再び登り始める。

しかし、小津安二郎作品「大学は出たけれど」のタイトル通り、高等教育を受けても就職先がなかなか見つからない未曾有の不景気は、人々の心を暗くした。そのような暗澹たる時代に、「エロ・グロ・ナンセンス」と呼ばれる、怪しげな事象が流行する。当時の大阪界限の寄席では、「漫才」はまだ「萬歳」と呼ばれていたが、猥雑であった。秋田實は、「決してエロではなかったが、やたらきたない話が出てきたり、そこのお客には普通であったが、世間一般には通用しない低級なものであった。」(秋田 1984b:90)と書いているように、猥雑で卑猥な「笑い」が場の主流を占めていた。大正期の経済発展による労働者層とホワイトカラー層を軸とする新興の社会層は、明治後期の新しい教育を受けた層でもあり、一世代前の古い思想には肌が合わなくなってきた、新しい刺激を求めている。「笑い」についても、一昔前の古い時代の「笑い」とは異なる新しい「笑い」を求めた。

そのような時代に、「健全な笑い」が求められてきたことも見逃せない。昭和3(1928)年6月に刊行が始まる、小学館と集英社による『現代ユウモア全集』は、円本ブームにも乗って、大きく売上げを伸ばす(写真2)。当初十二巻完結の予定が、結局全二十四巻の刊行となった。内容見本には「哄笑微笑苦笑の大ジャズバンド」、「世間相人間相のチャールストン・ダンス」と銘打たれて(写真3)、第一回配本は佐々木邦の『明るい人生』、タイトルからも世の暗さを吹き飛ばそうとする企画がうかがえる。出版社は新聞広告を何度も掲載し、「ユウモアの夕べ」という講演会を各地で開催した。編集に携わった鈴木省三は、「ユウモア全集の作家たちは、また一風かわったユーモラスな講演をやった。当時ユーモア小説という言葉は普及していなかった。一般には風刺諧謔小説とか滑稽小説とかいう呼び方をしていたので、ユーモア全集というタイトルは、当時としては大胆な思いきったつけ方であった。当時一流新聞には『ユウモア全集』とか、『マルクス、エンゲルス全集』などという広告が大きく出ている。この広告を見て不審に思った子どもが、父親に『マルクスとユーモアとどちらが偉いのか』ときいたというゴシップがあったくらいである。」(鈴木 1985:53)と回想している。講談社から発行され、子どもから熱烈な支援を受けた月刊誌『少年倶楽部』には、明るく健全な笑話類が投稿され、昭和4(1929)年には発行部数50万部を超えた。大人向けの雑誌にも、欧米の健全なジョークが読み物として掲載されていた。

この「ユーモア」ブーム、健全な「笑い」の希求は、時代状況を背景に、文字を読める新興社会層が、前時代的な古い「笑い」ではなく、新しい「笑い」を求めた結果であろう。この新しい「笑い」は、低俗すぎず、高尚すぎず、生活に潤いを与える娯楽としての「笑い」であったことは、『現代ユウモア全集』のラインアップからもわかる。

このような時期に、猥雑であった「萬歳」にも変化が現れる。そうした猥雑さをきらい、一方では落語に見られる古さをきらい新社会層が、新しい寄席芸を求め始める。大阪では、その傾向が強

く見られるようになる⁷。

ところが、「笑い」の要素を持ち合わす落語は、古い芸に固執するあまり、東京でも大阪でも、新社会層には受け入れられなくなる。このような時代の動きを察し、寄席の刷新を図ったのが、吉本興業である。吉本せい、林正之助ら吉本幹部の目は鋭かった。矢野誠一は、せいが「急増する小市民などとよばれる新しい階層や、大衆と称する庶民たちの娯楽的関心をひきつけるには、伝統の上にあぐらをかいて古風な演出に固執している落語では、もはやちからが衰えつつあることを、ひしひし感じていたのである。」と指摘する(矢野 2017:132)。昭和初期のユーモアブームの最中、昭和 5(1930)年に十銭という破格の安さで楽しめる「十銭萬歳」を始め、成長してきた新社会層を取り込んで行く。

そこに登場したのが、背広姿の横山エンタツと花菱アチャコであった。「君」、「ぼく」の呼びかけは、新社会層の日常語であった。エンタツ、アチャコら新しい「萬歳」が「インテリ萬歳」、「高級萬歳」と呼ばれるのも、低俗なものに対する「インテリ」、「高級」だけではなく、新社会層の持つ自己意識であった。

この点を矢野は、「洋服を着て、対話が中心になって展開される新しい萬歳は、見事に新しい層の求めているものと一致した。背広という、サラリーマンとおなじ服装で舞台に立った萬歳師が、そこで展開する対話の藝は、当然のことながら大阪弁で、この大阪言葉による対話には、持って生まれた滑稽感がついてまわったことも、新しく生まれ変わる藝にとって恰好な役割を果たしてくれた。その滑稽感が日常的であればあるほど、いわゆる小市民層の生活感覚と一致してくるのであった。」(同 158)と説明する。

秋田は、「昭和の初めごろの娯楽界の状態は、ある意味で大正の初めの時代と、非常によく似ているところがある。」(秋田 1984b:65)と述べ、古い娯楽が廃れ、新しい娯楽が生まれる時期であったとする。大正の寄席は、「舞台と客席とがいっしょになって、やがて新しい娯楽の生まれてくるふんい気をつくっている真っ最中であった。」(同 48)そして、「舞台と客席がいっしょになって」(同 52)雰囲気を作り上げるが、それは「同じ暮らしをしている者同士がその暮らしの中で普段つかっていることばで、客席と舞台がムダ話をしていたのである。舞台の二人が、お客のかわりに、あれこれと話し、それに対する返事が客席からの笑いや拍手だったのである。」(同 52)客席は萬歳師の芸を見て楽しむだけではない。舞台の上で語られる世間話は、客の世間話でもあった。ここに萬歳師である話し手と客である聴き手は「笑い」によって相互の信頼関係を作り出す。客は聴いた世間話を介して、自らが社会の一員であることを再認識する過程で、社会と自己との信頼関係を創出する。自らが聴いた代弁者の世間話は、自らが生きる世間での出来事である。たとえ不満があっても、「笑い」で不満を吹き飛ばし、自らが属する世間を居心地の良い、気の置ける場所として肯定する。このような力学が、当時の、とりわけ大阪の寄席で作用し、その点を吉本せいた

⁷ これは職場と娯楽場と自宅の区域が区別されず、比較的近場にある都市構造によるものと考えられる。それぞれがそれぞれの延長線上に環状構造で繋がる状態になり、娯楽場もまた生活の一部という感覚があったため、生活の変化が娯楽の嗜好に強く影響したためであろう。

ちは、嗅覚鋭く察したのである。

「サンデー毎日」昭和6(1931)年10月11日号に掲載された「新作掛合万歳 奈良見物」、作者名はなく、「横山エンタツ、花菱アチャコ」、当時新社会層の間で絶大な人気を誇った漫才師の名前になっている。時期から考えると速記録であろう。冒頭は

「毎日えゝお天気が続いて気持がよろしいなあ」

「いやほんまに結構です」

「このお天気を利用して、どつかへ出かけましたか」

「あまり遠方へ行けません、前のサンデーに奈良のほうへ出かけて見ました」

「そりや愉快でしたやろ、君おひとりで」

「いや僕と家内とお子達と」

「エーどこのお子達と」

「いや自分の御子達と」

「自分の子供にお子達てなことはいらんね」

「こりや失礼、自分と自分の子供と自分の家内と」

「あたりまへや、人の妻君を連れて行かれるかい」

と、ボケを含みながら、日常にありがちな話で始まる。奈良見物の話をツッコミとボケで進めながら、最後のオチへとつなぐ。片方が、奈良の大仏は木造だと言い出す。どちらがエンタツで、どちらがアチャコかは書いてないが、当時の人々にはすぐにわかったと思われる。女学生たちがやってきて、遠い昔にこのように大きな大仏を金で造れるわけがない、きっと木造だと言い出したので、それは違ふと口を挟むが相手にされない。年長の女子学生が傘で大仏のお尻をたたくと、コツンと木の音がした。

「エー君世の中にこれをもつて不思議といはなければなにをかもつて不思議といふか」

「いやこれやほんとに不思議や」

「そこで女学生さん達がそれ御覧なさい。大仏は木で造つたに違ひない、たゞ今たしかにコツンと木の音がしちやありませんかと僕にいふ」

「フーム」

「そこで僕も返答に苦しんだ」

「そりやさうやなあ」

「あまりをかしいので大仏さんの番をする人に尋ねた」

「どういつて」

「金で造つた大仏が女が叩けばコツンと木の音がしたのはどういふ訳ですか」

「そしたら番人はなんといつた」

「よく考へ御覧なさい、如何に大仏さんが金仏でも十七八の娘さんにお尻を叩かれたら誰でも一時は木(気)になると」

このような萬歳が「高級」であつた。猥雑さも、卑猥もない。この年の9月には満州事変が勃発

する。そのような暗澹たる時期に、「萬歳」は「笑いの下の平等」を実現する⁸。昭和8(1933)年に、吉本興業は「萬歳」を「漫才」とし、ここに近代的な芸能性を帯びた「漫才師」が登場することになった。

漫才師が「笑いの下の平等」を実現できたきっかけのひとつは、前述の矢野の指摘のとおり(矢野 2017:158)、背広姿という、その服装にもあった。読売新聞大阪本社文化部は、「舞台での正装とされていた紋付き・はかまを脱ぎ捨て、背広姿で高座に上った。ちょうどサラリーマンという新しい階層が目立つようになってきた時期でもあった。」(読売新聞文化部 1999:24)と指摘し、吉本興業元文芸部長橋本鐵彦の「大衆と同じ服を着ることで、観客が親近感を持った。そうして高座と客席が一体となり、面白さや楽しさが生まれた。」という発言を紹介する(同 24)。聴き手と同じ服装で、聴き手と同じ世界での出来事をおもしろ楽しく斬り出す。時には、生活の不満も「笑い」を呼び起こすネタとする(写真 4)。こうして漫才師と観客は「笑い」の元に平等な立場となり、漫才師と聴き手、聴き手同士の相互信頼関係が構築され、その信頼関係は社会と聴き手の間にも信頼関係を創り出して行く。創出された信頼関係は、崩れては創出されるという再創出の連鎖を繰り返し、信頼関係の層が少なからず積み重なり、軍靴の音がしきりに響く中、人々は大きな不安を和らげて生活を送った⁹。

一方、寄席という小さな空間での社会的な信頼関係の創出は、会社と社会の間で信頼関係を構築したい吉本興業自体にとっては、大きな利益であった。芸能という怪しげな世界では、社会からの信頼を得ることは大きな課題である。吉本せいは各所に多額の寄付を行い、社会的な褒賞を受け、大阪朝日新聞とつながって満州への慰問団を派遣するなど、社会的信頼を力で勝ち取ることに苦労した。その結果、すでに寄席空間で創出されていた信頼関係は聴き手と会社の間にも構築され、吉本は社会的名声を得、聴き手である大衆は社会的に認められる層となって行く¹⁰。

わずかの帰還に全国を圧巻した「漫才」は、新社会層のみならず、あらゆる層を巻き込み、聞き手たる人々は軍靴の音鳴り響き出す不穏な時代に「笑い」を媒介として、自己の身を置ける場所としての社会を認知する。それによって、人々は社会を信頼するだけではなく、社会という目に見えない存在から信頼を受け、より社会との結びつきを強くすることになる。「漫才」が短期間で全国を圧巻するのは、日常の「笑い」によって「笑いの下の平等」を実現し、そこから聴き手たちが日常においても社会と信頼関係を結び出すという機能が確実に作用したからである。

大阪の漫才は寄席以外の場所でも、演じ手と聴き手の信頼関係を構築することになる。ラジオ

⁸ 「萬歳」が「漫才」となり、社会的信頼関係創出の機能を果たすようになったのは、秋田實の功績による。秋田は、子供も大人も誰でも楽しめる健全な「笑い」を持つ「漫才」の創作に努め、「漫才」を「舞台芸術」として扱おうと考えた。また、「よみもの」としての漫才も多数執筆した。

⁹ ミスワカナのような女性漫才師が登場し、男性とコンビを組みながら、女尊男卑の漫才を演じたことも、女性が社会への信頼関係を創出するきっかけになった。

¹⁰ ただし、「力」で信頼を得た会社に対しては、戦争末期には劇場の閉鎖という形で、信頼を破壊されることになるが、この「笑い」によらない社会的信頼関係の構築の過程は今後十分な検討が必要である。

中継による漫才の全国放送は、大阪の「笑い」ではあったが、全国で「笑いの下の平等」を実現する。読売新聞文化部は、「下品で女性が寄り付く雰囲気などまるでなかった寄席漫才が、ラジオの電波に乗ることによって、猥雑さをそそぎ落とし、子供連れでも安心して聴けるものになっていったのである。」(読売新聞文化部 1999:27)と述べている。

寄席という場は男性客が主流であり、男性中心に社会的信頼関係が創出していたが、昭和9(1936)年6月からラジオで漫才が放送されるようになると、女性や子供、さらに寄席に行けない高齢者など、多くの階層を巻き込んで、「笑いの下の平等」を実現し、そこから男性と同じように社会への信頼関係を創出することになった¹¹。寄席の世界を飛び出した漫才は、寄席空間ではなく、世間の基準に合わなければならない。精錬された漫才の内容は、より多くの人に「笑い」をもたらすことになった。

同じ頃に東京でも新しい芸の成長を見ることができる。「漫才」に遅れること3ヶ月、同じ昭和8年4月に、浅草で古川緑波らが軽演劇劇団「笑の王国」を旗揚げする。浅草ではすでに、昭和6(1931)年12月にエノケンこと榎本健一と二村定一が劇団「ピエル・ブリアント」を結成し、活躍していた。

ところが、彼らは聴衆との社会的信頼関係を十分に築き上げていない。「漫才」が極めて日常的で、世間的な話題を取り上げ、観る側と演じる側の一体感が生まれるのに対して、東京の演劇団の「笑い」は、どうしても観る側と演じる側の壁を作ってしまう。これは、東京と大阪の「笑い」に対する態度の違いもあろうが、「笑の王国」は無声映画の活弁士らが中心で、映画の空間という世界に生きてきた人々であったため、「漫才」のような「日常性」を演技の中に取り込めなかったことも要因であろう。古川緑波、榎本健一らの努力は実り、離散集合をくり返しながらも、芸人個人の人気は盛り上がるが、芸としては大阪から進出してきた「漫才」にお株を奪われることになる。関東大震災以前の東京の演芸界でも、大阪から進出してきた「萬歳」が好評を得たのと同じ道であった。大阪の「漫才」が東京でも放送されるようになると、視聴者は同じように漫才師との信頼関係を創出し、社会への信頼を増して行った。

一方、当時の「流行」であった、プロレタリア運動、社会主義運動は、闘士が救済の対象とした「民衆」からも見放される。その最大の原因は、いずれの層からも社会的信頼を受けることができず、とりわけ、救済の対象とした労働者階層と運動者たちとの間に信頼関係が生ずることはなかった。

戦時下の統制社会の厳しい生活の中で、人々が耐え忍んで生活ができたのは、統制という権力的で暴力的な支配下に入っていたからではない。芸人が生み出す「笑い」によって人と人との社会的信頼関係を構築させたことで精神的なつながりを強固にし、不穏な現実でありながら、目に見えぬ社会は自分たちを守ってくれるという希望を持ち得た点を踏まえる必要がある。

¹¹大阪の漫才界は秋田實ら帝大で学んだ者たち(秋田は中退)が漫才師を助けて大きくなった。プロレタリア文学運動や社会主義的労働運動に関与した秋田實らは実際に労働者層と接触体験があり、思想は別として、そのような人々を見る目が養われていた。

4. 「笑和運動」—国策による社会的信頼創出の試み

昭和 12(1937)年 7 月に盧溝橋事件で日中戦争が始まると、日本全国民が戦時下の体制に強制的に組込まれる。戦地は苛酷であり、軍隊は厳しく、「笑い」などなかったという国民の暗いイメージを払拭するために、政権は戦地、軍人の「ユーモア」を報道し、戦争の明るさを強調するとともに、「笑い」の必要性を重んじる。一方、朝日新聞は吉本興業と組んで芸人の慰問隊を大陸方面に派遣し、「笑い」で現場を励まそうとした。この頃から、朝日新聞の紙上に戦地での「ユーモア」を報道する記事が登場する。盧溝橋事件直後の 10 月 27 日朝刊には「弾丸のユーモア奇蹟座談会」を掲載し、激しい戦いの中にも「奇蹟としか思へぬ『弾丸のユーモア』がどこかで起つて居る。」という。12 月 9 日朝刊には、「豪膽のユーモア作戦」の見出しで、江湾方面でのある部隊の戦いぶりを紹介する。偵察に出掛けた部隊が敵に出くわさないため敵陣直前に朝まで居座り続け、見方の到着とともに攻撃を仕掛けた。「朝までまよ一服」、「敵前坐込み戦術」、「ヘタリ込み戦術」で、敵を追い払ったと伝える。

このような記事には、「笑い」の「解放作用」による緊張の緩和を目的とするとともに、「親和作用」により、勇ましい戦闘を美化して、国民の目を戦争へ向けようとする意図も見てとれる。「笑い」を起こすような余裕を持って、戦地では戦闘が行われていることを宣伝することで、「皇軍」の優勢を伝えている。「笑い」が国策に利用され始める。

昭和 13(1938)年 4 月に国家総動員法発令、14(1939)年 5 月にノモンハン事件、9 月について第二世界大戦が勃発、15(1940)年 6 月に近衛文麿首相は新体制推進の決意表明をし、国民は否応なしに戦時体制に組込まれることになった。そして、16(1941)年 12 月 8 日、太平洋戦争が勃発する。国民は辛い生活を強いられることになる。

その直前の 3 月に、内閣情報局は「笑和運動」を実施する。その全容は不詳だが、読売新聞 3 月 1 日朝刊には「笑ひの爆弾投下」、「漫画を全国へ撒きちらす情報局」、「神経鎮静の『笑和運動』」と見出しが躍る。記事によれば、「なんとなく」市民の神経が尖ってきたようで、この雰囲気「明朗な奉公精神に転換させたいと頭をひねってゐた」情報局が全国的に「笑和運動」を展開して、「物の不自由にとんがりがちな社会空気の中和」に取り組むという。その手始めとして、漫画で「笑ひ」を振りまくことになり、岡本一平らの代表的な漫画家 50 人が新体制、家庭、社会、職場の四部門に「奉公精神を織り込んで得意の筆を揮つて朗かな笑ひ」を横 1m、縦 50cm の画面に描き出す。漫画は 4 月 1 日から 6 日まで銀座三越で展覧し、「市民へ健康な笑ひを吹き込んだうへ順次全国各地に巡回展を開き笑和運動の尖兵としての役目を果すことになる。」ことを意図していた。それに合わせて標語川柳も募集し、「笑へ今興亜の岩戸半開き」、「よく笑ふ母へ一家が睦じい」など 4 点の例句を掲載している。

その後しばらく誌上に「笑和運動」の記事はなく、次は 3 月 20 日～22 日、24 日～28 日、3 月 31 日、そして 4 月 5 日の記事が最後となる。

3月26日の同朝刊には、「笑ひの爆弾、漫画で笑話運動」と題して、「さあ笑へ笑へ朗かに！と陽気な春に魁けてていらだつ市民生活に笑ひの爆弾をふり撒く情報局”笑和運動”＝既報＝の第一段を承はって登場する漫画が二十四日漸く出来上つた。」と伝えている。最初は岡本一平、北沢楽天、穴戸左行、宮尾しげをの作品であった。朝日新聞は吉本興業とつながり、市中はもちろん戦地にも「笑い」を届けていた。それに対抗して、読売新聞は「漫画」で対抗したようだ。朝日新聞には、情報局の「笑和運動」の記事は見当たらない。

巡回展がどれだけの成果を挙げたか。残念ながら、詳細はわかっていない。海軍の宣伝誌『戦線文庫 銃後読物』昭和16(1941)年6月特別号に、石黒敬七が「おもしろ『笑和漫画展』を撰る記」を執筆していることが、橋本健午のHP『『戦線文庫』研究』の『戦争と漫画・漫画たち』に紹介されている¹²。橋本の引用によれば、「春は花も笑ふといふ興亜奉公日の一日、天気は晴朗、風はや、強いが吹く風は温かく心よい。／銀座の三越に、一日から六日まで、開かれるといふ、『笑和運動漫画展』の見物にと出かける。／これは最近、笑ひを忘れた面白からぬ現象があらここに見られるので、情報局が主催となつて、全漫画壇を総動員で、この非常時を乗り切る度量を国民に植付けの一助として、笑和川柳にふさはしい笑和漫画五十余枚を描いてそれを展覧したものだ。／時間は午後二時、会場は笑へ、笑へ、…より押すな押すなの大盛況。／先づ右の端から人並に混じつて拝見するとしよう。／見物はみな口に川柳を唱えながら、次へ次へと絵に見入っていく」と書かれており、「北沢楽天「日の丸を守る心は皆丸い」、宮尾しげを「笑ひ顔向けりや相手も笑ひ顔」、近藤日出造「譲り合ふ笑顔と笑顔美しい」、岡本一平「非常時下笑つて母は切廻し」、横山隆一「家に待つ笑顔へ飛んで帰るなり」、小野佐世男「電話口声に笑顔がこぼれさう」など、「笑いのオンパレード」三十首が石黒の感想つきで紹介されている。」¹³。

内閣情報局発行「写真週報」同年4月2日第162号は、「笑和運動」を特集している(写真5)。小学生から大人が笑っている写真が表紙を飾る。『『何がそんなに嬉しいんです？重役も課長もタイピストも給仕も、揃ひも揃つてさ、月給が一ペんに倍にでもなったんですかね』『君等はすぐそんなケチなことしか考へんから話がしにくい。僕等の会社のモットーは笑つて働けだ。誰も彼もが仏頂面ぢや第一仕事の不愉快で、能率も上らぬ。笑ふ門には福来る一笑つて時局にぶつかりや日本の明日は洋々たるものさ。』』と表紙説明がある。特集は8ページのモノクロ写真で、標語川柳を含む解説文を載せる。写真は、撮影のために笑っている様子で、不自然な感じがする。12～13ページが「笑和運動誌上漫画展」で、石黒が紹介する宮尾しげをの漫画と川柳がある。特集の内容はこれだけしかない。また、この号以降に「笑和運動」を扱った号はないようである¹⁴。明らかに、大きな運動として展開することはなかった。

¹² 『戦線文庫』研究

<http://www002.upp.so-net.ne.jp/kenha/sensen/sensen7.html> 2019年3月16日確認

¹³ 『戦線文庫』には、秋田實の読物漫才が何度も掲載されている。

¹⁴ 国会図書館デジタルコレクション「歴史的音源」に、同年6月に発行されたレコード「笑和ぶし」の音源があるが未確認。「笑和運動」に関連している歌であろう。

「笑い」によって、国民生活の不満をそらし、生活に精神的ゆとりを持たせようとする「解放作用」が働く。不満の心を追い払う「浄化作用」も働く。「親和作用」と「誘因作用」によって、人々の心をまとめ、統率力を強める。戦時体制で生活を縛る国、軍部に対する不満を「笑い」でそらすと同時に、お互いの信頼を高め、そこから国、軍部に対する信頼を意図的に構築しようとする。これがこの運動の根底のねらいである。相互の信頼関係から個々人と社会との信頼関係が成立し、国民を体制下に縛ることで統率を図る。「笑って時局にぶつかりや日本の明日は洋々たるものさ。」と発言して、知らず知らずに国民を体制下に組み込み、現状肯定へと導く。「笑い」を利用する社会的信頼関係の国策は、これが最初で最後であった。

情報局が、この運動の成果をどのように評価したかはわからない。この運動は、目立った成果もなく終了したようである。漫才は、次々に新作が現れ、体制への忠誠を語りながら、戦時体制への不満をおもしろ、おかしくつぶやく。この運動は、50点の漫画以上の新作が現れず、「笑い」のある川柳標語も思想の押しつけであった点に大きな欠点があった。人々の心を捉えるような力、つまり誘引作用も親和作用もなく、人々の緊張を解きほぐす力、つまり解放作用も浄化作用もなかった。さらに見れば、国家と人々が対等にならず、人々が下位に位置するのであるから、「笑いの下の平等」が実現しない。そのために、社会的信頼関係を構築することができなかった。「笑い」を起こさせる側に「悪意」があると、社会的信頼関係は創出しないという事実を、歴史が強く語っている。

5. 「笑い」と社会的信頼関係

明治期の自由民権運動は、運動家の一部が演説に「笑い」の要素を取り込むことで、聴衆を「笑い」によって誘因し、聴衆間の社会的信頼関係を創出し、運動家と聴衆の相互に信頼関係を構築する試みをなした。そして、さらに社会と信頼関係を構築しようとした。ここに見ることができる社会的信頼関係の創出は、大規模なものではなかったが、自由民権運動の盛り上がりに影響を与えている。各地で演説会が盛会となり、個々人の意見を明確に述べるできるようになったのは、運動家と聴衆の信頼関係が成立したからである。

その後、昭和初期に「笑い」による大規模な社会的信頼関係の創出が行われる。当時の「ユーモア」ブームも、「笑い」による社会的信頼関係の創出を個人レベルで実行した大規模な現象と見ることもできる。「ブーム」の流行後に、全国規模で「笑い」を起こしたのは漫才師たちであった。漫才師たちは「笑い」を引きおこすことが仕事であり、自由民権運動家たちのように政治的主張を伝えることが目的ではない。この時代の特徴は、信頼関係を相互に結ぶことを求め、なおかつ社会との信頼関係も結ばなければならない、新しい社会層の人々が成長していた点にある。その社会層が、その上位や下位の層といっしょに、漫才師の「笑い」に飛びついた。その結果、全階層が「笑いの下の平等」化によって相互に社会的信頼関係を創出し、戦時下の息苦しい社会とも信頼関係を構築することになった。戦時下でありながらも、文化的にも精神的にも当時の人

々にゆとりがあったのは、人々が社会との間に信頼関係を構築し、その関係がゆとりを生み出していたからであろう。

とりわけ大阪で「漫才」の「笑い」を媒介にして、社会的信頼関係を確実に構築して行く形跡が見て取れる。これは、関東大震災以後、一時的ではあるが、文化的中心が大阪に移り、「大大阪」の発展とともに、新しい階層が大きく成長してきたことに一つの要因がある。そして、漫才師、秋田實を初めとする漫才に関わるインテリ層、さらに吉本興業などの演芸会社が、この階層の「笑い」の嗜好を感知し、舞台の上で日常を「異化」して演じるという漫才を完成させ、それがまたラジオという最新の技術によって拡大したことも、もう一つの要因である。

そのような「笑い」による社会的信頼関係を国民レベルで創出し、「難局を乗り切る」と称して国家との信頼関係を構築しようとしたのが、内閣情報局であり、「笑和運動」であった。この運動の最大の難点は、庶民レベルでの「笑い」が起こらなかったことにある。一コマ漫画とお仕着せの「標語」で「笑い」を取ろうとしたが、漫才のように視覚にも聴覚にも訴える動的な手段ではなく、「一コマ漫画」という静的な手段に訴えるため、「笑い」があっても、漫画家と読者の間に十分な信頼関係が生まれなかった。内閣情報局の「上から目線」の運動では、国民は不満を昇華しきれない。この運動は歴史上、唯一の国家による「笑い」を利用した社会的信頼関係構築の試みであった。

戦後から現代には、「笑い」による社会的信頼関係の創出の大きなうねりは起こっていない¹⁵。戦前の漫才成立期は、階層の大きな細分化がなく、娯楽も限られていたため、「笑い」の活用は有利であった。戦後、階層が細分化され、さらに年齢層により「笑い」の嗜好が異なるようになり、娯楽も多数現れたため、「笑い」によって大きなうねりが起こりにくくなっていると考えることができる。しかし、小さな社会的信頼関係の創出の芽生えは、少なくとも大阪では、各地に見ることができる。

まず、落語家たちによる地域寄席の場である。ホール寄席のように大人数で落語家を「鑑賞」する会とは異なり、唾がかかるような範囲で参加者が「笑い」を起こす。その場で、落語家と聴き手の間に信頼関係が成立し、参加者同士で話が弾み、人的なつながりを生み出す。地域寄席を中心に、相互の社会的信頼関係が成立する。戦前の漫才もこのような形で、小さな関係が大きな関係に成長した。残念ながら、そこから大きな関係につながらない。その理由、原因は今後精査したいが、落語会の数が多すぎるのが一因かもしれない。

地域図書館などで開催される生涯学習講座の現場も、内容によって、それが落語や漫才のような「笑芸」を媒介にしなくても、自然な「笑い」によって相互の信頼関係を構築している場合が多い。

「笑い」による社会的信頼関係は、たとえば被災地での復興援助に応用できる可能性もある。本稿での事例分析を元に、「笑い」による社会的信頼関係を、現代においてどのように構築する

¹⁵ 大阪においては、戦後復興期のラジオバラエティー番組の役割を今後検討してみたい。民間放送が参入した昭和26(1951)年からテレビ放送が始まる34(1959)年までの在阪ラジオ局、JOBK、新日本放送、朝日放送は競って「笑い」の番組を制作、放送した。

か、今後の大きな課題である¹⁶。

¹⁶ 本稿事例から考えると、今日流行の「笑芸」を見て「笑い」を発することが「健康に良い」という考えに疑問を持たざるを得ない。「笑い」だけでは健康につながらず、むしろ「笑い」によって相互の信頼関係が生じることが健康に結び付くことを考察する必要がある。この点から、「ユーモア」とは、別の視点から対象を見て、知的なおもしろさを起こし、「笑い」を相手に生じさせ、「他者と発話者との間に信頼関係を創出させること」と考えることもできる。信頼関係を創出しない「笑い」は、「ユーモア」があるとは言えない点も、今後考える必要がある。

参考文献

- 秋田実 1984a 『ユーモア交渉術』 創元社
- 秋田実 1984b 『大阪笑話史』 ノア書房
- 井上宏 1988 『笑いの力』 関西大学出版会
- 浦和男 2011 『明治前期における笑い論の受容と展開』 文教大学文学部紀要 25-1
- 浦和男 2012 『成熟する笑い―昭和初期の笑い相―』 笑い学研究 19
- 浦和男 2014 『日本における「笑い学」の黎明―明治期の「笑い」理論』 笑い学研究 21
- 織田正吉 2013 『笑いのこころ ユーモアのセンス』 岩波現代文庫
- 桂枝雀 1993 『らくご de 枝雀』 ちくま文庫
- 鈴木省三 1985 『わが出版回顧録』 柏書房
- 棚橋正博校注編 2000 『江戸戯作草紙』 小学館
- 寺田寅彦 「わらい」『寺田寅彦随筆集第一巻』 岩波文庫
(初出『思想』1922年1月号)
- 松浦政泰 1893 『応用文章学』 博文館
- 矢野誠一 2017 『新版女興行師吉本せい』 ちくま文庫
- 読売新聞大阪本社文化部編 『上方放送お笑い史』 読売新聞社

Construction of Social Trust through “Laughter” : A research based on a historical point of view

Kazuo URA

[Abstract]

“Laughter” has four functions for human relationship: affinity, attraction, purification and release. “Laughter” with these functions is a way to construct social trust between those who are together with. Piling up this small creation will make bigger one, including more people. Such trust will grow up and people will rely on their society and vice versa. This is often the case with historical events. In this article, the author points out how “laughter” functioned in creating social trust from a historical point of view. At *Jiyuminken-Undo*, or the movements for getting freedom and rights, in Meiji era, they had to make people laugh when they spoke in public. “Laughter” would create trust between the speaker and the audience and among the audience. In 1930s, story tellers of *manzai*, or comical story telling arts, made a lot of audience laugh out loud and create social trust between those who were in theaters. People with social trust each other could endure their severe life in times of war. At the almost same time, the government carried on *Showa-Undo*, or the campaign for living a cheerful life by laughing. They forced people to laugh and got no results. Analysing these events, we have to consider how we use laughter to create social trust hereafter.

Keywords & phrases: Laughter, Humor, *Jiyuminken-Undo*, *Manzai*, *Showa-Undo*

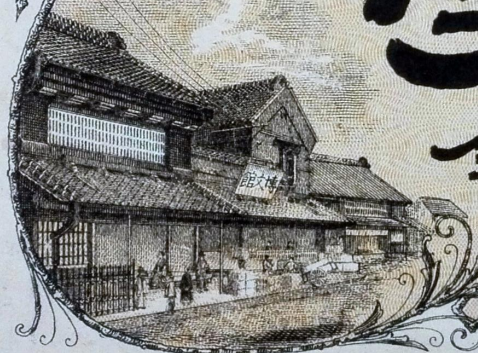
通俗教育全書

第五十九編

應用文章學

全

松浦政泰編



東京博文館

写真1 松浦政泰『應用文章學』表紙



写真2 『現代ユウモア全集』内容見本表紙

笑 微 笑 苦 笑 の 大 笑 バズ ドン ヤ

世間人相間のチヤスルーントダス

しかも
本全集は
一大社會教科書り
生活指導書であ

◇著者は當代の一流大家、作品はダイヤモンドの如くブラチナの如く類稀なる天下の絶品!!
文壇の大家、坪内逍遙先生、英文學界の泰斗戸川秋骨先生の高邁華麗なる識見、思想家としての長谷川如是閑先生の卓抜奇警なる觀察、堺利彦先生の辛辣なる經濟社會の批評暴露、漫畫壇の代表的作家としての近藤浩一路先生と岡本一平先生、又、刀圭界の新人として鋭いメスの光を現はされる、正木不如丘先生と高田義一郎先生の兩醫學博士、怪異的作品をもつて鳴る大泉黒石先生在り、輕快な異國情緒の表現で有名な牧逸馬先生は世界のユウモアを求めて目下歐米漫遊の途上に在り、しかして編輯者兼執筆者たる生方敏郎先生は、同じく酸いも辛いもかみ分けた人生の達觀家、我人共に許すユウモリストであり、佐々木邦先生は、今回慶大教授の顯職を辭して専心ユウモア文學に傾倒されつゝあり。如何に本全集が現代の各最高階級を網羅し、舊來の落語的趣味に墮するも高踏的であり、典雅な笑、新らしき笑を樹立する使命をもつてゐるものであるかを知られよ。



写真4 大阪・輝文館から出版された慰問用漫才集。昭和15(1940)年頃。横山エンタツと花菱アチャコは、このような背広姿で漫才を演じた。



写真 5 『写真週報』162 号表紙